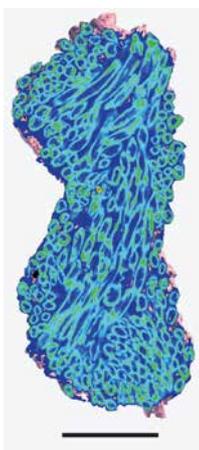




mnividens

【オムニヴィデンス】



縄文の糸玉

福島県三島町荒屋敷遺跡は縄文時代晩期（約2400年前）の遺跡で、低湿地であることから木製品や漆塗製品、繊維製品がよく保存されています。上図の赤漆塗り糸玉は、太さ0.5～0.8 mmほどの細い糸を40本程度束ねて結び目を作っています。1本の糸は、さらに細い糸を2～3本撚り合わせてできています。

糸玉の断面（左図）では、青色から緑色へと密度が高くなります。繊維部分は青色、コーティングした赤漆の薄膜は緑色になっています。薄膜の厚さはほぼ均一で、断面は滑らかで粒子状のものを含んでいません。このことから糸玉は赤漆でコーティングした撚り糸を束ねて作られたと推定されます。スケールは1 cm。

（資料：福島県三島町教育委員会所蔵）

2018.11

NO.

58

「チ」は地域の「チ」

於香川大学第21回大学博物館等協議会・第13回博物科学会参加の記

地域との連携

標記の協議会と学会が2018年6月21日(木)22日(金)に香川大学幸町キャンパスにおいて開催され、当館からは藤澤敦、鹿納晴尚、齋藤拓、そして小川知幸がこれに参加することになった。

会場は同大学敷地内のオリーブスクエアという複合施設であり、なるほど香川県が全国一の収穫量を誇るオリーブの色合いであった。協議会の主たる柱として企画されたシンポジウムは、「大学博物館と地域との連携」と題され、要旨集にはその開催趣旨として、「香川大学のような地方大学では『地域との連携・地域への貢献』は重要な課題であり、また地方大学博物館では地域との連携が博物館活動を活性化させるうえで有効」とあった。

シンポジウム

論点開示では、石垣忍氏(岡山理科大学教授・恐竜学博物館長)が「大学らしい博物館のあり方とは?」として、これまでつとめていた私立博物館(林原自然科学博物館)の閉館から大学博物館へと移籍し、その経験から両者を比較してそれぞれの特性を紹介した。館長がいわばプロデューサー、マネージャーとして全権を掌握する私立博物館を総合デパートに喩え、大学博物館は各研究領域の教

員により分権的に運営される商店街としたところは妙に首肯できる部分であった。だから、一部が欠けても総崩れにはならないという。

次に松本由樹氏(香川大学農学部准教授)は、「地域連携」の具体的事例として博物館企画展における畜産・養蜂等における高大連携などの取り組みを紹介し、最後に谷地森秀二氏(NPO法人四国自然史科学研究センター長)が四国内外の行政施設や研究者と連携した哺乳類標本の保管の取り組みを紹介した。「あと必要なのは箱物だ」という題名がしめすように、さまざまな野生動物標本の保管環境はきびしい。行政はもとより、大学にすらそのスペースは確保されておらず、引越しに次ぐ引越しを余儀なくされているという話は、ひたすら身につまされるものであった。

この3名をパネリストとしたシンポジウムでは、たとえ高校生たちがそのような野生動物の生態に興味をもったとしても香川大学にそれを学ぶ専攻はないという事実が明らかにされ、会場に衝撃が走った。たしかに農学部では農林水産資源にかかわる開発研究が中心に据えられており、四国の、また香川県の自然環境の研究のためには県外の大学に出ざるを得ず、そして卒業後は二度と戻って来(れ)ない、という。それでは地域と大学(博物館)

とは、どのようにかかわればよいのだろうか。

「地域」の意味するもの

ところで、論点開示者が想定した「地域」とは、それぞれ別のものであったといえる。石垣氏の場合は一定範囲の空間に居住し、博物館のターゲットとなる住民層であり、松本氏は端的に地場産業(ゆえに産学連携)、谷地森氏は自然環境であった。そのため意欲的な企画であったにもかかわらず、個別の問題点の析出には功績があったといえるが、「大学博物館と地域との連携」への展望までには至らなかったようにおもわれる。

そもそも「地域」とは、Region(リージョン)に対応し、辞書的には「他から区別される特性をもった地表の部分」を指すが、その場合の特性とは、自然、文化、経済、歴史等のさまざまな側面に関係している。また、たとえば一般に「地域の再生」などと言う場合、土地そのものではなく、そこで暮らす人びと、あるいは比較的規模の小さい範囲での人間集団を含意しているのであり、実体はともかく、ローカルな地域社会(Community、コミュニティ)の意味であることが多いだろう。

クニ

いっぽう歴史学では、長期的に特色ある発展を遂げた領域を指し、世界史では



香川大学オリーブスクエア(左)



シンポジウム「大学博物館と地域との連携」

それらを「ヨーロッパ世界」「東アジア世界」「イスラーム世界」などと呼称することもある。きわめて広い空間である。そもそもこれは一国史への対抗から現れた用語であるが、近年では、国家をこえた「環海峡地域」「環地中海地域」なども議論されており、より狭い空間的まとまりを「地域」と呼ぶことにたいする筆者の違和感のもとになっている。ただし、フランス語でペイ (Pays) と呼ぶ地域、一例を挙げればペイ・ド・ロワール、またアルザスのように、国家の内部に複合的なまとまりをもつ圏域もある。

このペイという言葉は、地方または「クニ」を意味するので、日本でいえば、「陸奥国」(むつのくに) のようなものだろうか。しかしこれとて、古代の「道奥」「陸奥」、江戸時代の弘前から会津までの諸藩相当、また明治以降の行政区分(現在の青森県)にいたるまで、場所もその広がりもさまざまであり、単純には比較できない。

国土と地域

このように「地域」とは自明ではないが、現代においてその再生や創生をめざすといった場合の「地域」とは、1930年代の世界恐慌や産業衰退後にアメリカ合衆国で実施された TVA (テネシー渓谷開発公社)、またイギリスでの田園都市構想のような地域計画 (Regional Planning) に端を発しているといえる。

いずれも経済的な衰退圏を救済し、自然環境を活用しながら人間の復権をめざしたものであったが、TVA は全国総合開発計画 (全総) としてわが国に受け入れられ、ODA として海外にも輸出されるよう

になり、平成 17 年 (2005) 以降は「国土形成計画」と名称を変えて国土づくりの方向性をしめしている。

その基本理念には、「特性に応じて自立的に発展する地域社会……の基盤となる国土を実現するよう」との文言があることからわかるように、「地域=地域社会」は国家における機能的部分として位置づけられているのである。

地域で生きるとは

しかし、農業や漁業などの自然経済から糧を得ていた伝統的なコミュニティ (地域社会) は都市化の波に洗われ、さらに経済のグローバル化が進展し、人びとがその「地域」で生きる理由は稀薄になってしまったようにおもわれる。それでは、地域を活かすうえで、自分が「地域とともに生きている」という感覚はもはや必要ないのだろうか。

たしかに都市部、農村、山村、漁村と類型化して特産物を前面に出せば、観光や移住も容易となるだろう。その代表的な表象のひとつがゆるキャラである。他方、人びとが政治や行政に積極的にコミットすることは地域が「自立的」であるための選択肢のひとつであろう。だが、それも移植可能であり、人びとのなかに内面化され共有される「かけがえのない地域」とはことなるのではないか。

「ふるさとラボ」

ここで注目される口頭発表があった。愛媛大学ミュージアムの徳田明仁氏は新居浜市の郷土資料室「ふるさとラボ」を設

計し、専門家による資料・標本の展示解説ではなく、市民主体の展示解説、学習会などを実施しているという紹介である。専門家は自分の説明したいことを説明してしまうが、一般の市民はそうではない。バックヤードの資料標本のなかから「自分とのかかわり」を見出すのである。すでに大学、大学院卒の市民も少なくないことから、たがいに教え学ぶこともできる。徳田氏は、担い手がまだ少ないと嘆いていたが、じつはこの施設を市民に提供したことで、大学博物館としての役割をじゅうぶんに果たしたといえる。言い換えれば、「ミュージアムの種を蒔いた」のである。

地域とは何か

地域とは何かということである。経済や行政や環境システムのようなそれを包みこむ共時的な仕組みの他に、自由な意思のもとで創造的に生きようとする人間の主体性が必要である。それは見聞きし、語り、感じる主観性のなかにも存在し、その意味で、通時的なものでもある。

さらに言えば、ひとりの人間は「そこで」生きる時間をこえて、未来と過去にもつながっている。そのつながりのなかでは遠い過去の光景や死者たちの悲しみや喜びの記憶さえ共有することができる。祠や伝統的な祭りがローカルな核になっているのはそういうことである。その記憶は枝分かれして広がり、ひとつのまとまりをつくり出す。言うなれば生者が死者たちと歩む祝祭が、人びとが「その場所で」生きるということなのである。

(文/写真=小川知幸)



鹿納晴尚によるポスター発表



香川大学博物館の展示スペース

東北大学学術資源研究公開センター 3 施設合同企画展 「東北大学 お宝見参」を開催しました

2018年7月2日（月）より20日（金）まで標記の企画展を川内南キャンパス附属図書館本館エントランス展示スペースにて実施しました。

学生の方々は「学術資源研究公開センター」という部局をあまりご存じないかもしれません。これは本学の総合学術博物館、史料館、植物園の3館園を統括する上部組織であり、2006年（平成18）に発足しました。本学の歴史のなかで研究や教育のために使用されたり収集されたりした、さまざまな学術資源（アカデミック・リソース）を今後の研究教育に利活用し、その成果を社会に還元するとともに、次世代のすぐれた人材を育成することをミッションとしています。

ただし、総合学術博物館は青葉山キャンパス、史料館は片平キャンパス、植物

園は川内キャンパスにそれぞれ所在しており、専攻がことなると、来館することなく卒業してしまうこともあると聞きます。自然史であれ、人類史であれ、動植物であれ、大学や研究の歴史であれ、本学には驚くほど豊富なオリジナルの資料標本が所蔵されており、一部はつねに上記の施設で公開されています。「それじゃあ、あまりにもったいない!」ということで、入学して間もない学生の方々にも3館園のことを知っていただく、という趣旨で本展は企画されました。

総合学術博物館は、岩石・鉱物、化石、金属等のコレクションや骨格標本など、史料館はかつての大学のたてもみや教官にまつわる史料、植物園は冬虫夏草の液浸標本などを展示し、さらに片平キャンパスの登録有形文化財にちなんだ史資料を

くわえ、さまざまなキャンパスに「秘蔵」されている貴重な学術資源を紹介しました。

展示面積等の制約もあり、3館園のいわばアンテナショップのような位置づけになりましたが、会期中はSMMA（仙台宮城ミュージアムアライアンス）の「見験楽学レポート」にも取りあげられ好評を博しました。

本展を観覧して興味をもった学生や一般の方々には、それぞれの館園にもその後、足を運んでいただけたようです。資料標本は所定の手続きを経て研究利用も可能です。

来年度もまた新たな展示資料を使用しながら附属図書館本館での合同展を予定しています。ご期待ください。

（文／写真＝小川知幸）



センター3施設合同展全景



ミミズのスタンドグラス



冬虫夏草コレクション



ヒメノガララの標本



アナグマ（上）、ハリモグラ（下）骨格、砂金（中央）など



片平キャンパス登録有形文化財にちなむ史資料の数々



ベガマタイト鉱物（左）、中新世二枚貝化石マツモリツキヒ（中央下）、テナガザル骨格（右）など

学都仙台・宮城サイエンスデイ 2018 と 南三陸子ども自然史ワークショップに参加しました

サイエンスデイ

2018年7月15日(日)に「学都仙台・宮城サイエンスデイ2018」が東北大学川内北キャンパスをメイン会場として開催されました。今年度はみちのく博物楽団(以下、楽団)が下記ワークショップを、総合学術博物館からは小川知幸助教が「なるほど世界史：魔女狩りと気候変動」という人文科学の講座プログラムを実施・開講して参加しました。またサテライト会場の理学部自然史標本館は当日入館無料としました。来場者は主催者発表で10,666名でした。

「謎の化石ティラコセファラの正体を探れ！」

ワークショップ(以下、WS)は、クイズと間違い探しカードゲームにより、古生代シルル紀から中生代白亜紀にかけて生息していた絶滅動物ティラコセファラ(囊頭類・のうとらうい)について学ぶものです。



ティラコセファラの実際の化石を解説

約3年前には宮城県南三陸町でキタカミカリス・ウタツエンスという新種の発見が話題になりました。WSでは実際の化石も展示して解説しました。

楽団とWS

楽団では、昨年度末に2人の団員が卒業したことにくわえ、学生としての忙しさが増して大変な時期となりましたが、新入団員2人も参加し、例年どおりの成功を収めることができました。

WSにはさまざまな力が必要で、まずは専門知識を教える力、デザインする力や計画行動する力も重要です。楽団には専門知識に長けた団員、デザインに長けた団員、行動力のある団員がそれぞれいて、役割分担しながらWSを作り上げてきましたが、今年度は、これらの役割を他の団員も分担しました。今後も一人ひとりのいろいろな力を伸ばして、それらを集結し、よりよいWSを作り上げていきたいとおもいます。

(文=速水 一)

南三陸子ども自然史WS

翌16日(月・海の日)には南三陸町の戸倉公民館で、南三陸ネイチャーセンター主催の「南三陸子ども自然史ワークショップ2018」がおこなわれました。楽団は、「アンモナイトのプニプニレプリカをつくらう」というWSで参加し、163名の方にご参

加いただきました。

WSは、プラスチック粘土をお湯であたためて柔らかくし、それを本物のアンモナイトからとった型に詰め、レプリカを作るというものでした。プラスチック粘土を温めているときの待ち時間には、アンモナイトが何の動物の仲間なのかというクイズをしたり、レプリカを作っているアンモナイトの名前と産地をラベルに記入してもらい、南三陸で産出する化石についての説明をしたりしました。

これまでに何回もおこなっているWSですが、より分かりやすいWSになるよう、説明パネルの表現を平易化しました。しかし、レプリカ作りに目を奪われ、説明を十分に聞いてもらえないこともありました。プラスチック粘土という入口から、いかにアンモナイトに興味をもってもらおうかが重要でしょう。

化石の産地として知られている南三陸町は、アンモナイトも多く産出します。来場者の方から、アンモナイトが採れる場所が近所にあるという話をお聞きしたり、子どもが拾った新生代の巻貝の化石が持ちこまれたりしました。化石の産地でWSをおこなう醍醐味といえそうです。

南三陸町へは移動の負担が大きいとはいえ、地域に密着した科学教育をすることの意義を感じました。

(文=青野葉介)



講座では小学生たちの鋭い質問も飛んで感動しました(小川)



南三陸子ども自然史ワークショップで主催者・参加団体と

博物館実習 VI (館園実習) 実施報告

総勢 27 名の履修生

2018年9月10日(月)から14日(金)までの5日間にわたって学術資源研究公開センター(総合学術博物館、史料館、植物園)では標記の実習をおこないました。今年度は27名の履修登録があり、博物館ではそのうちの12名を受け入れました。

例年どおり、初日は片平キャンパスにて考古学陳列館(赤煉瓦書庫)の見学に始まり、埋蔵文化財調査室の菅野智則先生、千葉直美先生、柴田恵子先生のご協力により考古資料の発掘から整理、保存処理、および収蔵状況について講義していただき、翌日から青葉山キャンパスの総合学術博物館(理学部自然史標本館)においてバックヤード見学と展示改善案プレゼンテーション等の実習に入りました。

手の仕事

今年度はとくに手の仕事(Handwork)をつうじてじっくりと展示制作の実際に取り組んでもらおうということで、プレゼンテーション準備についてはほぼ1日のみとし、13日(木)と14日(金)の2日間をのり付きパネルの切り出し、垂れ幕の採寸と切断、展示パネルおよび展示品の並べ方など、学芸員であれば必須のスキルとなる、手の仕事に割り当てました。

集中講義形式の限られた時間のなかで、学生たちがカッターナイフや定規を使ったグループ作業に黙々と取り組むようすが印象的でした。理論面でのフォローもそこに、いきなり現場に放り出されたようなものだったかもしれませんが、実習の最後に、一人ずつ感想を述べてもらったところ、これまでの学芸員科目は座学ばかりであっ

たので、この実習は本当に楽しく有意義であったとの意見が多く、教職員としては望外の喜びでした。

展示改善の妙案

また、各班の展示改善案プレゼンテーションでも、ラボとVRを活用した白亜紀の環境(二酸化炭素濃度2,000ppm、恐竜の視点)体験や巨大なシダ植物のディスプレイ、また、アクアリウムを模して海中から地上への移行を視覚的に表現するなど、時間や専門性の制約を逆手にとった明快な案が提示されました。

履修生たちは展示を評価する視点を手に入れただけでなく、展示を作りだす第一歩のスキルも身につけることができたとおもいます。最後に、ご協力いただいた関係者の方々に記してお礼申し上げます。

(文/写真=小川知幸)



① 片平キャンパスの考古学陳列館見学



② 菅野、千葉、柴田先生の講義



③ 博物館バックヤード見学



④ 展示についてのレクチャー



⑤ 各班プレゼンテーション



⑥ のり付きパネルの切り出しとパネル制作



⑦ 展示用の垂れ幕の採寸と切断



⑧ 作ったパネルを並べてみる



⑨ 標本の配列と講評

栗駒における防災・減災実践教育実習の参加報告

東北大学学術資源研究公開センターと東北福祉大学、栗原市の3組織で2018年3月14日に締結された「地域の発展と人材の育成に関する包括的連携協定」の事業の一環として、東北福祉大学が実施する「栗駒における防災・減災実践教育」の野外実習を同年8月27日・28日の2日間にわたって栗原市および一関市周辺でおこないました。

本実習では、2008年（平成20）6月8日に発生した岩手・宮城内陸地震による地盤災害の現場を見学し、学生たちが自然災害の実態について学ぶことを目的としました。東北福祉大学の学生20名、同大学教職員8名、東北大学総合学術博物館から1名（高嶋）の合計29名が参加しました。

初日は栗原市荒砥沢（あらとざわ）にある東北福祉大学・栗駒研修所「さくらの湯」においてバーベキューをおこなった後、高嶋が栗原市周辺の地質と地滑り・土石流についての講義を実施しました。2日目は研修所の近くにある荒砥沢ダム上流の大規模地滑りによる崩壊地を見学をおこないました（右写真）。

現地では、東北森林管理局の宮城山

地災害復旧対策室長の佐々木弘義氏が、崩壊前後の地形の変化や復旧作業の概要を解説してくれました。2番目の見学地である駒の湯温泉は、地震に誘発されて発生した土石流によって建物が流され、大きな被害を受けた地区です。実際に土石流に巻きこまれた駒の湯温泉の菅原昭夫さんの体験談に学生たちは大きな衝撃を受けたようでした。

最後の見学地の祭時大橋（まつるべおおはし）は、本巡検のなかで震源にもつ

とも近い場所であり、破壊された大規模な橋の途中まで歩くことができ、地盤災害の被害を間近で観察することができました。

本実習の9日後の9月6日未明、北海道胆振東部地震が発生し、地滑りにより多くの被害が起きました。この地盤災害のメカニズムは岩手・宮城内陸地震のメカニズムと類似しており、本実習の参加者も地盤災害への備えが重要であることを実感したのではないかとおもわれます。

（文＝高嶋礼詩／写真＝鹿納晴尚）



荒砥沢ダム上流の大規模地滑りによる崩壊地

私とティラコセファラ～囊頭類復元模型、鋭意製作中～

2011年に東北大学総合学術博物館の学生スタッフとなったわたしは、当時から博物館が力を入れていた東日本大震災の被災地での化石発掘活動や子ども向けワークショップの補助などに幾度となく参加させていただきました。その活動のなかで発見され、たびたび話題になっていたものがありました。それは当時まだ正体がわからず、“謎の化石”と呼ばれていた数センチほどの化石でした。それが“謎”のままであることに未練を抱きつつ、わたしは2014年にウィーン大学へ移ってしまいました。

それから4年が過ぎ、今年の4月に東北大学の学生スタッフに戻ったわたしは“謎の化石”と再会し、それが今では“ティ

ラコセファラ”と呼ばれていることを知りました。日本で初の囊頭類化石として報告され、ウツギヨリユウと並ぶ南三陸地域の化石の目玉になっていたのです。

正体は分かったものの未だに謎に包まれた生物であり、化石だけではどのような生物なのか十分に伝わりません。そこで博物館ではティラコセファラの復元模型を製作・展示することにしました。

それを任されたのがわたしでした。こうしてわたしとティラコセファラは、みなさまにその魅力を伝えるべく、毎週数時間見つけ合う生活を送っています。

（文＝木下峻一）



復元模型製作のようす

東北大学総合学術博物館 Information



企画展「もっとしりたい日本とキューバのコウモリ」&「黎明の自然科学」

総合学術博物館では本学生命科学研究科との共同企画展「もっとしりたい日本とキューバのコウモリ」を、2018年10月2日(火)より11月25日(日)まで開催中です。会期中にはワークショップも実施しています。詳しくは総合学術博物館のホームページ等をご覧ください。

また、本学附属図書館北青葉山分館との協力によりミニ展示「黎明の自然科学」を11月1日(木)より11月18日(日)まで開催中です。同期間中に川内キャンパスの附属図書館本館では企画展「西洋古典への扉」を開催しています。



理学部自然史標本館

●ご利用案内

総合学術博物館の常設展示は理学部自然史標本館にて行っています。下記は理学部自然史標本館のご利用案内です。

●入館料

大人150円/小・中学生80円
(団体は大人120円、小・中学生60円)
幼児・乳児は無料、団体は20名以上です。

●開館時間

午前10時から午後4時まで

●休館日

毎週月曜日*1、
お盆時期の数日*2、年末年始*2、
電気設備の点検日(例年8月最終日曜日)*2

*1 月曜日が祝日の場合は開館、祝日明けの日が休館となります。
*2 日にちが確定次第ホームページにてお知らせします。



●交通手段

■仙台市地下鉄
仙台市地下鉄東西線「青葉山駅」で下車(仙台駅より乗車時間9分)。「青葉山駅」北1出口より徒歩3分。

■仙台市観光シールバス「ふるふる仙台」
JR仙台駅西口バスプールより乗車。「理学部自然史標本館前」で下車。所要約30分。

■自家用車
東北自動車道仙台宮城インターチェンジより仙台市街方面へ向かい、青葉山トンネルを仙台城方面に出て、右折2回、大橋経由。駐車場あり。

総合学術博物館のホームページもご覧ください



東北大学総合学術博物館のホームページ
<http://www.museum.tohoku.ac.jp/>

東北大学 総合学術博物館 THE TOHOKU UNIVERSITY MUSEUM

〒980-8578
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
tel/fax. 022-795-6767

©The Tohoku University Museum

Omnividens [オムニヴィデンス]

Omnividensはラテン語で、英語のall-seeingに相当し、「普く万物を観察する、見通す」の意味をもっています。